

## 良心教育に関するシンポジウム

日時：2013年11月14日（木）17:30～19:30

場所：同志社大学 今出川校地 良心館107

（司会） 皆さま、本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。定刻になりましたので、ただ今より、良心教育に関するシンポジウムを開催させていただきます。私は、本日の司会進行をさせていただきます、同志社大学キリスト教文化センター所長の原誠と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。なお、本日のシンポジウムにつきましては、後日、本日の模様を撮影し動画配信する予定がございますので、客席の様子やお顔を含めて、ご参加者の皆さまの姿が映る可能性があるということをご承知おきください。

最初に、主催者を代表しまして、学校法人同志社総長の 大谷 實 より、ご挨拶をさせていただきます。

### 挨拶

大谷 實 氏（総長）

皆さん、こんばんは。開会に先立ちまして、主催者側を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。本日は、良心教育に関するシンポジウムを開催いたしましたところ、ウィークデーの遅い時間、大変お疲れのところ、このようにたくさんの皆さまがご来場していただきまして、誠にありがとうございます。ご出席、心から感謝を申し上げる次第でございます。

現在、急激な少子化と国公立の教育体制の大幅な変化を受け、私立学校を取り巻く競争環境は年々厳しくなっています。各学校とも、生き残りのために教学の独自性、アイデンティティを強調し、PRに努めているゆえんです。幸いにも同志社は、キリスト教主義、自由主義（リベラルアーツ）、そして国際主義を基礎とする「良心教育」を教学の理念とし、今日まで展開してまいりました。この良心教育の伝統が、度重なる困難を克服し、今日の同志社を築き上げたともいわれています。私は同志社総長として就任以来、新島の言う良心の全身に充満したる人物を育成する良心教育、これこそが同志社教学の理念であって、また、同志社精神であると訴えてきました。そして、一国の良心としての人物を養成することこそが同志社のミッションであり、良心教育は同志社のブランドであると申してきた次第です。

しかし、残念なことに、同志社のブランドとも言うべき良心教育について、これまで正面から議論されたことはございませんでした。ましてや、キリスト教主義、自由主義、国際主義という教学の理念と良心教育との相互の関連についての検討もなされてきませんでした。さらに、良心教育はキリスト教主義を言い換えたにすぎない、良心教育を独自に議論してもあまり意味はないという意見もあるようです。

そこで、同志社キリスト教教育委員会の皆さんとご相談し、ご協力を得まして、良心教育の現状と課題を考えてみる必要があるという趣旨から、今日のイベントを持たせていただいた次第です。せっかくの機会です。これまで学園全体として明確にされてこなかった良心教育の中身を考え、同志社の良心教育の現状はどうなっているのか、そして現代にふ

さわしい良心教育とは何かを展望していただければ幸いです。

水谷理事長、村田大学長、加賀女大学長、木村中・高校長には、大変な大役を申し付けまして誠に申し訳ない次第ですが、今日はよろしくお願ひしたいと思います。会場の皆さんにおかれましても、しばらくの間、有意義な実り多い時間になりますことを心からご期待申し上げて、甚だ簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。本日はご来場、誠にありがとうございました（拍手）。

（司会） それでは、基調講演へとプログラムを進めてまいります。講演に先立ちまして、本日の講師、学校法人同志社理事長の水谷誠先生のご略歴を簡単にご紹介させていただきます。

水谷誠理事長は、1951 年生まれ。1974 年に同志社大学神学部を卒業されました。1977 年には、同志社大学大学院神学研究科修士課程を修了されています。その後、1991 年に同志社大学神学部専任講師としてご入社され、現在では同志社大学神学部教授でありまして、神学部長、ならびに学校法人同志社理事長を兼任されています。詳細はチラシの裏面をご覧ください。

基調講演の演題は「良心教育とは」です。水谷誠理事長、よろしくお願ひします（拍手）。

## 基調講演「良心教育とは」

水谷 誠 氏（理事長・神学部長）

今日はしばらくの間お付き合いいただきまして、同志社における良心ということについて、水谷の視点から少しご案内させていただきたいと思ひます。40 分ほどの間でうまく説明できるかどうか、なかなか難しいところではございますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

### 1. キリスト教の三大宗派

先ほど大学の評議会があり、そこで良心について少し懇談をする機会がありました。ある先生から、最近の同志社の学生には、同志社はカトリックの学校だろうと思っている人がいる、あるいは、カトリックとプロテスタントというキリスト教の違いが分からない学生がいるという話がありました。同志社は、新島襄がアメリカで触れた、プロテスタントイイズムのキリスト教の大学であるということをお初めに申し上げておきたいと思ひます。

先日、東京の上智大学の創立 100 周年記念式典に出席してまいりました。あそこはカトリック教会の修道会であるイエズス会がバックボーンにある大学です。カトリックのキリスト教とプロテスタントのキリスト教の肌合ひの違いを随分感じました。2000 人ぐらい入れそうな大きなホールで開催された式典の壇上には学校法人の関係者に加えて多くの賓客が招かれています。ローマのバチカンからは枢機卿そして大司教と言われる人、さらに、上智大学はベルギーと関係があるのだらうと思ひますが、ベルギーのプリンス、プリンセスご夫妻、そして、壇上の正面に、天皇陛下、皇后陛下ご夫妻がお座りになりました。

同志社ではおそらくそういう習慣はございません。キリスト教も多彩であるなど思ひました。そしてこの同志社は「良心」という言葉を大切にします。この言葉はもちろん日本

語として通常の言葉ですので、われわれは「良い心」「良心」ということで、それなりに一人一人イメージしながらその言葉に付き合っています。ただ、私どもの同志社における良心といいますと、この漢字のもつ意味あいとニュアンスが違うところがあります。

ただ今、カトリックとプロテスタントの違いということを申し上げましたが、種々さまざまあるキリスト教の中で同志社のキリスト教の立ち位置をご案内しますと、歴史的には、おおよそ 20 世紀前半ぐらいまでは、キリスト教世界は大きな三つの潮流に分かれているといわれていました。

2000 年の歴史の中で、特にキリスト教が発達していったのはヨーロッパですが、東ヨーロッパ、とりわけロシアやギリシャといった地域に広まっていったキリスト教を一般に東方教会といいます。日本では、ギリシャ正教、ロシア正教といわれるようなキリスト教のグループです。ドストエフスキーやトルストイなどのロシアの文豪は、その教会に所属する人たちです。

もう一つは、西方のキリスト教、西ヨーロッパに広まったキリスト教です。一般にローマ・カトリック教会、あるいはカトリック教会といわれています。東方の教会と西方の教会は、古代から中世にかけて考え方の違いから枝分かれしました。

そして、16 世紀になると、西方のキリスト教の中からさらに枝になるグループが分かれ出ました。16 世紀に、ヨーロッパ、とりわけドイツやスイスを中心に、宗教改革が始まりました。その当時の有名な修道士にマルチン・ルターという人がおりますが、この人の活動をきっかけにして、西方のカトリック教会から別れ出て出来上がったキリスト教が、プロテスタントのキリスト教です。

同志社のキリスト教、創始者の新島襄が触れたキリスト教は、そのプロテスタントのキリスト教の中のとりのわけアングロサクソン系、英語圏で現れ出たキリスト教、そのうちでイギリスからアメリカのニューイングランドに渡って大きく発展したキリスト教です。一般にコングリゲーションナリズム（会衆派、会衆主義）のキリスト教会といわれています。

キリスト教は 2000 年の歴史の中で、同じグループであっても時代によっていろいろな変遷をしています。なかなかややこしいのですが、新島がアメリカに滞在したのは、19 世紀後半です。宗教改革は 16 世紀の出来事ですが、それからさらに時間がたって 19 世紀後半ごろのアメリカ・ニューイングランドのプロテスタントのキリスト教である会衆主義のキリスト教に触れ、そのキリスト教的な精神を身に受けて日本に戻ってきたのが、新島襄という人なのです。

同志社は、キリスト教主義という表現と共に、自由主義、国際主義を標榜し、自由、自治、自立の精神を大切にしています。このようなものの見方は、同志社の良心教育と密接に関係しており、その背景となるのは、このプロテスタント的なキリスト教の精神であると言えるのです。

私は神学部の教員でありまして、少々キリスト教に立ち入った話になってしまいますが、同志社の背景がキリスト教を土台にしていますので、少しご勘弁いただきおつき合いをお願いいたします。

## 2. プロテスタントと「良心」

プロテスタントのキリスト教と良心という概念の関係について、エピソードとして印象

深い出来事があります。16世紀のことですが、当時はカトリック教会の修道士であり学者であったドイツのマルチン・ルターという人物が、カトリック教会の当時のものの見方に違和感を覚え、疑問を覚え、そして始まったのが宗教改革運動です。そしてルターはこういうテーマでいろいろと議論しようではないかということを、当時のカトリックの有力な神学者たちに呼び掛けました。ヴィッテンベルクという東部ドイツの町の城館付き教会に、「95カ条の提題」を貼り出したのです。

ところが、その議論の内容、ルターの見解について、カトリック教会は肯んずることができませんでした。それから3年余り後、結果として、マルチン・ルターはカトリック教会から破門されてしまいます。ルターが教えている内容はキリスト教に反すると異端宣告をされ、破門されてしまうのです。

当時、ドイツやオーストリア一帯を支配していた大きな帝国がありました。「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」と言われるもので、オーストリアのハプスブルク家が代々皇帝を務めていました、その皇帝のファミリーは、カトリックのキリスト教信仰を受け入れていた人々です。カトリック教会から破門されたルターは、その後、神聖ローマ帝国の帝国議会（国会）に召喚され、いろいろな尋問を受けることとなります。その結果、1カ月後ぐらいに、彼は帝国から断罪され、帝国の法律の保護外に置かれてしまうことになりました。これはどういうことかということ、誰かがマルチン・ルターに危害を加えても、加害者は法律で罰せられないということです。こういう極めて危険な状況になり、彼をサポートしていた、その当時の領邦君主の一人に内密にかくまわれて過ごすこととなります。

その帝国議会（国会）での尋問の中で、ルターがどのように証言したのかが文書に残っているので、少し紹介させていただきます。「私は、聖書の証言によって、あるいは明白な真理によって論駁（ろんぱく）されないならば、私が挙げた聖句と神の言葉に捉えられた良心に服し続けます。私は何も撤回できないし、撤回するつもりもありません。良心に背くことをするのは、誠に難しいことであり、無益であり、危険なことであるからです。神よ助けたまえ。アーメン」。そういう言葉が残っているのです。

このようなものの見方から始まったプロテスタントのキリスト教には、この良心というものの見方は常に通底している重要なものです。時には強く主張されることもありますし、弱くあまり聞こえなくなってしまうこともあるのですが、プロテスタント的なキリスト教の精神に常に流れ続けているものの見方、それが「良心」という言葉です。新約聖書の中にこういう表現があります。『使徒言行録』のパウロの言葉ですが、「兄弟たち、私は今日に至るまで、あくまでも良心に従って、神の前で生きてきました」という表現です。

ここで、良心という言葉がどのような意味を持つのかということについて、少し調べたことをご紹介します。日本語における「良心」は、大辞林という国語辞典によりますと、「漢籍」に表れており、孟子によりますと、「良心とは、人本来の善なる心である」ということとなります。また、日本国語大辞典では、「良いと信じるころに従って行動しようとする気持ち」と説明がなされています。

このように言われると、そういうものなのだろうとわれわれは納得し、「善なる心に基づいて振る舞おうとする」、そのあたりでいいのだろうという気持ちになります。大体おおむねそれでいいのだろうと私も思っていますが、日本語における「良心」という漢籍に由来する言葉と、キリスト教的、あるいはヨーロッパ的、ギリシャ的と言ってもいいかもし

れませんが、その「良心」の概念は、結果的によく似ているかもしれないけれどもニュアンスが違うのであって、そのこのところを少しご案内いたします。

もともと英語では conscience です。conscience という言葉が日本語に訳されたのは、明治3~4年(1871~1872年)のことであったと思いますが、中村正直が『西国立志編』というイギリスのスマイルズという人の書物を日本語訳したときに、conscience という言葉の訳語として「良心」という言葉を当てはめました。しかし、アルファベットの方を見直してみると、conscience という言葉に「良い」という意味合いはありません。もともとはラテン語の conscientia という言葉にさかのぼるものですが、conscience を con と science に分けて見直してみますと、science とはサイエンス(科学)ですから、元来は「知る」という意味です。con とは「共に」という意味です。つまり、conscientia というラテン語の本来の意味は、「共に知る」なのです。『新約聖書』はギリシャ語で書かれていますが、ギリシャ語の synecdesis という言葉もまた同じく「共に知る」という意味を持っています。

それ故に、アルファベットの世界では、例えば「良い良心(good conscience)」、あるいは「悪い良心」という表現が使われます。「良い良心」というのは日本語で言うところの冗語ですし、「悪い良心」というのは、そこに言葉の矛盾が入ってしまいます。しかし、conscience という言葉には「良い」という意味合いはありません。代わりに「共に」という意味が入っています。昔から、哲学やキリスト教の思想、神学の歴史の中で、「共に」というのは一体何を指しているのだろうかということが、いろいろな形で議論されてきました。

その内容に入りたいのですが、「良心」という言葉とキリスト教的な conscience に伴うことについて、少し前提として申し上げておきたいことがあります。われわれは「良心」という言葉を、例えば「良心の呵責」「良心に責めさいなまれる」という表現でよく使います。「良心の呵責」というのは、大体において、自分自身がしでかしてしまったことについて、それは良くなかったのではないかという形で心がうずく場合に使います。それ故に、「良心」という言葉を耳にすると、われわれはどうも居心地が悪いというか、自分の今までのなりふりを見返して、何か気持ちが快活になれないこともあったりします。

しかし、先ほど聖書の言葉を申し上げましたが、例えばパウロが、「あくまでも良心に従って、神の前で生きてきました」と語る場合には、しでかしてしまった過去のことに対して良心が向かい合うということよりもむしろ、今の自分、あるいはこれからの自分はどのような人生をたどるのか、どのような道行きを選択して生きていくのかということに重点があります。聖書、あるいは元来の横文字の「良心」という言葉は、そういう側面で使われることが多いのです。言うならば、ネガティブではなくポジティブな仕方で、良心と照らし合わせて自分の道行きを考えていくという側面があります。そのことを頭に置きながら、考えていきたいと思います。

### 3. 「conscience (共に知る)」とは何か

私は、conscientia、conscience という言葉、「共に知る」という言葉を次の二点を軸にして理解しています。いろいろな解釈の仕方がありますが、一つは、自分がどうするのかという振る舞いについて自分自身が自分に問い掛ける、自問自答という仕方。そこには、自分ともう一人の自分がいるということで、それは「共に」ということに対応するのです。衝動的に何かをやってしまいたいという気持ちに襲われたとき、自分の理性はそれを押し止

め、何とか落ち着かせようとする。自問自答するところには、人間が日常生活を送っていく上で、成熟した人間が日常生活を送っていく上で、とても大切な要素があると言うことができます。

第二に「共に知る」ということを、さらに聖書的、キリスト教的に理解します。自問自答というのは、自分が自分と向き合うだけであって、自分という枠を抜け出すことはできません。キリスト教的な良心理解は、その悩みの中にある自分、判断に迷っている自分というものが、さらにこの世界を越え出た、超越した、あるいは、この世界のその外にあると言ってもいいかもしれませんが、キリスト教では「神」と表現してきた超越的な存在との関わりの中で何事かを定めていこうとする。そういうところにキリスト教的な良心理解の特徴があると言うことができます。

皆さま方は、キリスト教会の礼拝に出席されたことがあるでしょうか。そうでない方でも同志社のさまざまな行事の中で、祈りという営みに接しておられます。何も知らない人からすると、一人の人が目をつぶって、誰かに呼び掛けているような形で独白しています。祈り、祈祷というのは、自分が神に語り掛け、呼び掛け、問い掛ける、あるいは自分の出来事について報告をする、神と語り合うとするという姿勢、それが基本的に祈りの精神です。そして、その中でさらに自分が現在悩んでいることについて神に問い掛けて、そして応答を期待する、応答を求めようとするところに、祈りという振る舞いがあります。

実際に応答が耳から聞こえてくるのかというと、私にはそういう経験はありません。直接に聞こえてくることはないのですが、祈りの精神というのは、問い掛けて応答を求める姿勢にあります。自分という小さなサークルの中のものの見方ではなくて、それを越え出たもの。この世の世界を越え出た存在から答えを求めようとする姿勢の中に、祈りという営みがあるのです。

基本的にキリスト教のものの見方は、人格関係と申しますか、自分と誰かが対話をする、私があなたと対話をする、「あなた」が神の場合もあるわけですが、対話をするという形の中で成り立っています。聖書には神話的な表現がいろいろなところに出てきますが、例えばアダムとエバが神さまと話をしたり、蛇と人間が話をしたりということが天地創造の物語に出てきます。それは、対話性ということが大きなキリスト教の特徴であるということを示しているのです。

私の友人に、曹洞宗のお坊さんがいらっしゃいます。実を言いますと、彼は私の1学年下で神学部に入ってきました。学部でキリスト教神学を勉強し、大学院の前期課程に入り、大学院の後期課程にも行き、おおよそ10年の間、とりわけ旧約聖書を勉強、研究してきた人ですが、10年ほどたってから彼が出した結論は、どうも自分にはキリスト教はそぐわない、どうも違うと言って、彼は禅宗のお寺に入って頭をそったのです。

今も覚えています、名古屋のお寺で頭をそって、それから1週間ばかりの間、休暇をもらったと言って、私の京都の家に遊びに来ました。福井県の永平寺で、半年でしたか1年でしたか、門外不出で修行に励まなければならないというので、その前に2~3日、私の当時のアパートに泊まっていきました。その間に、1日は全てが修行ですが、その一つとして、最初に頭をそってから何日間かたって、再び頭をそらなければならなくなりました。洗面の鏡の前に行って自分でそりだすのですが、まだ慣れてないですね。カミソリでそるわけですが、あまり上手ではなく、後ろの方をそってあげたことがあります。

そうして永平寺で修行をして、毎日毎日何時間も座禅をするわけですが、ある時私は彼に「曹洞宗では、本当に悟りというものはあるのか」というつまらないことを友人であるということで不躰に聞いたことがあります。そのときに、彼は「分からない」と言いました。「ただし、座禅をしている間に、人間というのは実にこういう存在であるということが分る。人間というのは、常にその時々思いにとらわれて生きていることが分る」と言うのです。

何かといいますと、毎日毎日座禅をしていて外にも出られないという状態の中で、ふとしたときに京都の虎屋のまんじゅうが食べたいということが頭の中に思い浮かびます。そうすると、その気持ちから離れられなくなる。食べられないから食べたいと思うのですが、食べたい、食べたい、食べたい。それが1日中続きます。1日どころではなく、2日目もまたその気持ちから抜けられない。そして、3日目も続いている。そしてあるとき、ふと気分が変わったのか、また別の思いにとらわれていくのです。

人間というのは、衝動的な欲求であれ、世間体であれ、名誉欲であれその他もろもろの自分の思いに毎日毎日、束縛され、とらわれて生きている存在です。それは曹洞宗の教えにとどまらず、キリスト教でも全く同じです。人間というのは、その時々これにしたいと思うことにとらわれながら生きていると言うことができます。キリスト教の良心、神と対話をしながら物事を決めていこうとするものの見方は、この世界の人間を引き付けるようなさまざまなものから少し離れて、この世界を越え出た存在に問い掛けて応答を求めそこに生きる指針を思い出そうとする。そういうところに、キリスト教的な良心の理解というものがあるように思います。

もちろん私どもは、日常生活の中で、例えば何らかの難題に直面したときに、友人たちに意見を求めます。あるいは家族・親に意見を求めたり、教師に意見を求めたり、相談します。その中で、おおむね妥当だろうという結論を最終的には自分で定め、その判断に従っていきます。成熟した人間として当然の振る舞いというか、社会の中に生きていくときに大切なものの見方であると思います。しかし、キリスト教的な良心というのは、そのような自分の周辺にある何かとの関わりは、それはそれとして、同時にそれに付け加えて、この世界を越えたものに問い掛けて応答を求めていきます。そして応答を求めつつ、そこで自分で悩みながら決断していくというところに、キリスト教的、あるいは同志社的な良心の理解があると思います。

今申し上げたことは、実を言うと形式的な良心の説明です。内容にかかわらず。例えば、同じようなテーマで悩んでいた二人の人がいたときに、問い掛けをして、答えを悩みながら求め、何らかの決断をしていくときに、ある人はこちらの方に進んでいき、別の人は同じテーマで考えた結果として、また別の方向に進んでいくことがあります。マニュアルのように、こういう場合にはこういう答えがあるとはっきりしているわけではない。そこで真摯に誠実に考えてみるというところに、大きなポイントがあるのです。いろいろな判断の基準、尺度がありますが、その中で、この世界を越えたものと対話を試みて、自分のスタンス、自分の位置を定めていこうとする姿勢。それが「良心」という言葉の持つ意味です。

#### 4. キリスト教的良心と同志社の「自由」「自立」「自治」の精神

その結果、同志社としては、例えば、自由・自立・自治という言葉が大切な言葉であると申し上げましたが、神様に問い掛けて応答を求めるという振る舞いの中で、別の視点から言うと、決断をするのは自分なのです。自分が、これが一番適切だろう、一番ふさわしいだろうと思い定めて、その中で生きていこうとするとき、その人は「自治」、自分を治めている、自己コントロールをしているのであり、「自立」、自分で立とうとしているのであり、そこには、それ以外のものに縛り付けられ、がんじがらめになって、しがらみの中で生きていくのではない、自由な生きざまがあると言うことができるのです。キリスト教的な、この世界を越えたものと対話を試みる、その中で自由に自分を治めて、自分の足で立って生きていく。良心と自由・自治・自立というのは、互いに関連する概念であります。

申し上げたように、良心の概念は極めて形式的です。それならば真摯に誠実に考えればいいのだなというのはそのとおりなのですが、では、そのようなものの見方の中で、具体的にはどういう進み方があるのかということの事例として、私は新島襄の生きざまを思い浮かべます。新島襄の葬儀のときののぼりに、勝海舟が揮毫（きごう）した「我らは世に与えんと欲す」という言葉がありました。新島が好んだ聖書の言葉にこういうものがあります。「受けるよりは与える方が幸いである」。彼はキリスト教的な良心理解の中で誠実に考えた結果として、そのような具体的な生き方を追求した人でありました。

少々駆け足になりましたが、また後でパネルディスカッションがございますので、必要なことがあればご案内もできるかと思えます。ありがとうございました（拍手）。

（司会） 水谷誠理事長、ありがとうございました。本日は、「良心教育とは」と題してご講演を頂きました。これより5分間の休憩とさせていただきます。

#### パネルディスカッション「同志社の良心教育」

コーディネータ：加賀 裕郎 氏（女子大学長）

パネリスト：水谷 誠 氏（理事長・大学神学部長）

村田 晃嗣 氏（大学長）

木村 良己 氏（中学校・高等学校長）

（司会） 続きまして、パネルディスカッションへと進めてまいります。パネルディスカッションに先立ちまして、本日の講師を務めてくださる4名の先生方をご紹介させていただきます。コーディネータは女子大学長の加賀裕郎先生です。パネリストは理事長・大学神学部長の水谷誠先生、大学長の村田晃嗣先生、同志社中学校・高等学校長の木村良己先生です。略歴につきましては、チラシの裏の面をご覧ください。パネルディスカッションのテーマは、「同志社の良心教育」です。講師の皆さま方、どうぞよろしくお願いいたします。

（加賀） それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。コーディネータを務めさせていただきます女子大学長の加賀と申します。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。



それでは、早速、中身に入りたいと思います。先ほど理事長から、同志社の良心、あるいはキリスト教主義的な良心の概念を、非常に明快・明晰に、特に「conscience (共に知る)」という視点からお話しいただきました。最初に、同志社大学長と木村高等学校長のお二方に、今の講演につきまして感じたこと、あるいはコメントをお話しいただきまして、水谷先生からそれに対するお答えと、言い足りなかったこと含めまして、お話しただけならと思います。

(村田) こんばんは。学長の村田でございます。先ほど水谷先生から、良心について非常に簡潔な、しかし深みのあるお話を伺ったところです。そこで、良心というのは語源からして対話をする、一方で超越したものと対話というお話を頂きました。

神学者の前で神学者の話をするのはなかなかリスクなことですが、私が尊敬するアメリカの神学者に、ラインホルド・ニーバーという人がおります。神学者二人に囲まれているのですから、私は大変不利な状況にありますが、このラインホルド・ニーバーのキーコンセプトの一つに「incongruity (不一致)」というものがございます。人間は善であり、なおかつ悪である。人間は、必ず死ぬが、スピリットは永遠である。そういう不一致の中で祈りが生ずるのだということをニーバーは論じているわけです。

今日のお話を聞いて、私は同じような感想を持ったのですが、私どもの同志社大学に引き付けて言うならば、同志社の魅力というのは、実に多様な人たちが集っていることだろうと思います。それから、同志社がこれからますますグローバル化を進めていく上でも大変重要な視点として、多様性に対する感性、異なる価値観に対する感性というものがあるだろうと思います。

しかし、他方で、価値観や文化が多様であってさまざまな見方があると言っているだけでは、これは相対主義に陥ってしまって、人間は物事を判断できなくなるわけです。他方で、多様なものだけでも、およそ人間である限り、人間に普遍の価値観のようなものがあるのではないかと、人間が共通して持てる真や善、美があるのではないかと。そんなことは、われわれ人間が一生もがいても決して見つからないけれども、しかし人間普遍の真・善・美があるのではないかとという探究心が他方で必要だと思います。

一方では、異なるもの、多様性への感性があり、他方では、普遍性を追求する探究心がある。ここには、基本的にニーバーが言う不一致があるだろうと思います。ここで不一致があるからこそ、水谷先生のお話と関連させるならば、われわれは祈らなければならないということであって、神との対話が生ずるということではないかと、今のお話を伺いながら感じたところでございます。

(木村) 同志社中学校・高等学校校長の木村でございます。対話ということで、今、ふと思い出したことがあります。昔、同志社高等学校にジェフ・バーグランドという男がいて、彼が同志社高校を辞めるときに、相談の中で「なぜ辞めるのだ」と聞いたことがありました。まだ私が30代の頃でしたが、その時に彼は「祈った」と語りました。そして「日本人の祈りは重すぎる、特に牧師がそうだ」と、牧師である私に向かって言われたことを思い起こします。彼いわく、「自分にとっては、祈りは対話である。その対話は神様との対話である」と。

今日、水谷さんが神学的に裏付けてくださった事柄と重なる気がします。日常的な事で言えば、例えば道に迷ったとする。右と左に道が分かれている。どちらに行くか迷った時、「神様、どちらに行ったらいいのでしょうか？」と神と対話して祈り、何となくふっと示された事柄に基づいて自分の進むべき道を決断していく。何らかの形で判断を迫られる時の祈りが、とても日常的なものだと、彼とのやりとりで感じさせられました。

日本の社会の中では、祈りというのは非常に仰々しいイメージがあって、何か困ったとき、切羽詰まったときに必死で祈るというイメージがありますが、もう少し緩やかなのだということを感じました。今日の対話という絡みで言うと、緩やかという表現はいい加減という意味ではなくて、身近な神との対話であるということに共感を覚えました。

もう一つ、私は今日、新島がキリスト者であったということ、再確認しなければならなかったと思います。つまり、何にも勝って新島がさまざまな判断、決断をして生きてきた。そして、結果的に学校をつくった。その時その時の判断の根底に祈りがあり、キリスト教があった。要するに、彼が生み出した学校だけではなくて、彼の夢や理想、あるいは建学の精神の背景に、プロテスタントのコングリゲーションなキリスト教の考え方が秘められていて、それが彼を突き動かしていったということ、同志社の中でも再確認するチャンスだったのではないかという気がしました。ありがとうございました。

(加賀) ありがとうございました。お二方の先生の講演に対するコメントでした。村田先生の方は、ラインホルド・ニーバーのお話をされました。実は、私の研究対象の一人がジョン・デューイで、ニーバーとデューイは論敵だったのです。ただ、同じ時代を生き、基本的に見ているものは同じだと思いますが、方法が少し違ったのかもかもしれません。その中で、多様性に対する感覚が必要だけれども、もう一つはそれを乗り越える普遍性という視点が必要ではということ、ニーバーを出してお話しになりました。

木村先生は、一つは、祈りをもう少し日常的なものとして捉えたらどうかということ、新島襄はクリスチャン（キリスト者）であり、そういう夢を抱いていたのではないかというお話でしたが、あらためまして理事長先生から、今の話についてさらにコメント、もしくは自説を再展開していただけたら誠にありがたいところでございます。

(水谷) まず木村先生の話からですが、今日の話の中でマルチン・ルターを取り上げることに悩みました。これは非常に重い話で、ルターにとっては生死に関わるようなところで良心という言葉を使っています。われわれは、そのような場面に直面して良心ということを使うということはあまりない、めったにないようなことですから、実を言うと、ルターは重すぎるなども感じています。要は、われわれが日常生活で物事を決めていくときに、どのような判断の仕方をしているのかということが、「良心」という言葉の内容についてのポイントではないかと思います。

もう一つ、村田先生がおっしゃったことですが、キリスト教的に言うと人間というのは不完全です。人間のつくり上げたものは、良いものであるにしても、決して絶対であり完全であるということはありません。全てのものの見方が出発いたします。その中で、できる限り良いものに近づけていこうとする。聖書の中には「旅人」という概念がありますが、われわれは旅人として、ある目的に向かって歩んでいるのだということ

です。

多分、同じ志を持つ結社としてできたこの学校が当初に掲げた建学の精神を目的にしながらさまざまな形でそこに向かって歩いていくプロセス存在が同志社に生きるわれわれであり、また、この同志社ではないかと考えております。

(村田) 思い出したのですが、先日、春学期卒業式の機会に引用したのですが、ドイツの美学者でアドルノという人がいます。ちなみに、ニーバーやアドルノを引用したからといって「あの先生は学があるな」とお思いにならない方がいいと思います。本当に学のある人はあまり引用はしないもので、中途半端な人間がこのように他人の言説を引用するのですが、そのアドルノが、「愛は、異質なもののの中に同質なものを見いだす力である」と言っています。これも、先ほどのニーバーの不一致と通ずるところがあるように思います。

それから、木村先生が、新島はやはりキリスト者だったということであらためて痛感するとおっしゃいましたが、新島や同志社に引き付けて言うならば、信念を持ちながら、しかし常に悩んできたというところが彼の魅力ではないかと思えます。同志社という学校をつくるに当たっても、自立したい、独立したいのだけれども、アメリカン・ボードとの関係があつて常に悩んできた、苦しんできた。そういう新島がいると思えますし、この京都という地で学校をつくることにより、いろいろな勢力との綱引きの中で悩んできた新島がいて、自分の強い信念を持ちながら、常に悩んできたのです。

国禁を犯してアメリカに渡るなど、私にはとてもできませんが、そういう新島の決意や信念に強さや憧れを感じると同時に、しかしいろいろなところで悩み苦しんでいる新島に、同じような人間として共感できる。それが大きな魅力であろうと思えますし、同志社という学校の歩みも、決していいことばかりがずっと続いていたのではなく、挫折や失敗などいろいろなことがあつて、しかしこの京都の地で138年、キリスト教を基盤にしてやってきたという振幅のようなものがかえって魅力ではないかという気がいたします。

(木村) まさに今、NHK 大河ドラマ「八重の桜」がその場面に突入しているところですよね。私は授業で新島襄を語る機会がありますが、とにかくかっこいいイメージがあります。しかしちょうど今、「八重の桜」で描き出されている場面にもなりますが、同志社ができる過程はそんな格好がいいものではなくて、石を投げつけられたり、廃校に追い込まれようとしていた時代があり、更には、戦中・戦後も続く苦難の連続だったのだらうと思えます。キリスト教というのは、ある意味では「弱さ」をどう受容していくかということを経験する宗教だと思えます。新島が常に悩み続けていたという一見「弱さ」を感じさせられること、それは決して格好悪いことではなく人間として当たり前のことなのだという理解は、同志社教育の中でも大切にしていかなければならない事ではないかと思えます。

今の時代は「強さ」を追い求めます。人間は動物ですから、本能的に「強さ」を追い求めるところがあるのかもしれませんが、神の前に有限な存在として、人間は「弱さ」を抱えて生きている。そのことを前提にしながら、「弱さ」を持つ者が「弱さ」を絆としてどう繋がって共に生きていくのか。そこに同志社の拠って立っている原点があるのではないかと思わされました。

それからもう一つ。良心と言うと、心の奥底にあるイメージとか、しまい込んでしまっ

ているイメージがありますが、むしろそれをどう表現していくかということこそが大切だと思います。新島は、「良心を手腕に運用する人物」「良心が全身に充満した人物」という表現を使っていますが、同志社教育の行き着くところは、良心をただ持っているだけでは済まされないという新島からの問いかけだと思います。その良心をどう活用していくのか、生きる時にどう使い込んでいくのか、それは一人一人に与えられた良心と向き合う課題ではないかと思います。

(加賀) ありがとうございます。大変貴重な指摘で、良心は心の奥底ではなく、むしろ外に出てくるというアクティブな面も持っているという話と承りました。

個人的に水谷先生に質問してもよろしいでしょうか。先生は先ほど、良心の定義は形式的で中身は問わないとおっしゃいました。ところが、例えばキルケゴールのような人も神と対話した人ですが、その場合の真理は主体性だと思いますが、もう一つ、中身の、実質の普遍性をキリスト教との関係でどのように理解したらよろしいでしょうか。

(水谷) キルケゴールが出てきて、だんだん難しくなってきました(笑)。先ほど、事例として禅宗のお坊さんのことを申し上げました。実を言いますと、木村先生と水谷はキリスト教の牧師です。その意味で、キリスト教的な視点で案内をしたのですが、キリスト教は日本ではマイノリティですから、同志社で教員・職員として働いている方々、また学生諸君、生徒諸君の大多数は、キリスト教以外の世界で生きておられます。

加賀先生のご質問のキリスト教的な内容については、新島襄の「受けるよりも与える方が幸いである」というものの見方、それは聖書の中の思想ですね。キリスト教的に言いますと、中身を埋めるのは、日常的に聖書の思想、聖書の物語になじんでいる中でだんだん自分の発想がそういうものに近づいていくということかなと思います。しかし、そうするとキリスト教的な色彩が強くなってきて、それはそれでいいのですが、大多数の方々、自分はキリスト教と無縁である、あるいはなじまないと思っている方々にとっては、自分なりの仕方で超越的なものと関わるといふ発想をお持ちになってもいいかもしれません。

例えば、仏法に従うということも当然あるでしょう。良心概念を幅広く取りますと、それは真摯に誠実に問い掛けて答えを求めようとするところにあるのだと思います。キリスト教的なところで言いますと、聖書という昔からある書物の中に現れたもの。聖書の内容も非常に多様であり、互いに相矛盾するような思想もたくさん入ってくるのですが、キリスト教の中に生きている人間は、聖書の中のどこかの言葉なり、ものの見方なりに親しみ、それを受け入れ、そこに生きる指針を持っています。そういう形で、キリスト教の人々は良心概念の内容を埋めていくことがあると思いますし、それ以外の場合であっても、自分なりの仕方で良心というありようの中身を定めていくこともあると思います。

基本的に、そういうものの見方は多様性につながるわけです。こうでなければならない、ああいうものの見方をしなければならないということではなく、要するに、決めた結果よりも、むしろ決めるプロセス、定めるプロセスに重大な意味を持つのが「良心」という言葉です。それ故に、いろいろと意見の違う人が出てくる。しかし、意見が違う人々もまた、そのプロセスを経たという意味において互いに尊重し合えるということになるのではないかと感じております。

(加賀) ありがとうございます。村田先生がだいぶうなずいていましたが、何か再コメントはございますでしょうか。

(村田) 今、水谷先生が「プロセス」という言葉が使われたので、次に発言の機会があれば言おうと思っていたのですが、恐らく、こういうシンポジウムが今日開かれたのも、総長のご挨拶にもありましたように、良心教育と言いながら、実は良心とは何かとか、同志社の良心教育がどうあるべきかについて正面から議論する機会がなかったからであり、これは大変大事なことだと思います。

他方で、同志社の良心教育はこうあるべきだとか、同志社大学では良心をこのように考えているというように、同志社に決まった良心の定義や、これが同志社の良心教育だというようにまとまったものがあるべきではない私は思うのです。そういうものが今までなかったことは、実は大変同志社らしいという気がするわけです。少し緩いというところもあるのですが、しかし、これが定義だと、みんながそれに従うというのではなく、言葉に出さないかもしれないけれども、みんながどこかで気に掛けていていつも考えているというのが同志社らしいし、そもそも良心というものだと思います。

そういう意味では、良心というのは、決まった答えがあるというよりも、ずっと思い悩んでいるとかみんなが考えているプロセスそのものだと思いますし、あるいは教育という営みもそうだと思います。同志社という学校も、これが同志社大学だという定まった姿があるのではなく、実はわれわれは、同志社といういつまでも続くプロセスの中にいるという気がいたします。

(加賀) ありがとうございます。だんだん良心という概念の核心に迫ってきたのではないかと思います。最初に水谷先生から、良心というと、日本の場合はイメージとして、既にやってしまったことを後悔するというニュアンスがあるけれども、そうではなく、むしろこれからやろうとすること、あるいは今していることに対して、我にとらわれつつそうしてしまうのではなく、それを一回、もう少し普遍的な別の目を持って外から見てみるという心の働き、これがキリスト教の場合は神様との応答ではないかというお話がありました。それによって最終的に答えが出てくるのではなく、お互いに何か分からないながら協働的に探求していく、そういうプロセスの方がむしろ大事ではないか、あるいは同志社的ではないかという話が出てきたと思います。

だから、良心の中身はこうだと定義するのではなく、むしろそうしたことが大事だと思いますが、お互いに絶えず前進していくプロセスを大事にするのが同志社の良心教育ではないかというようなお話だと思いますが、私のまとめ方は間違っているのでしょうか。これからまたさらに進んでいくわけですが、一応そういう形でまとめさせていただいて、時間がなくなってしまうので、次の話題にさせていただきます。

これまで、良心教育ということで同志社の各学校でどのような取り組みをしてきたのか。まずは同志社全体として水谷理事長にお話させていただいて、次に同志社大学の村田先生、それから同志社中高の木村先生、最後に私から女子大の取り組みを若干述べさせていただくという形で、よろしく願います。

(水谷) 個人的な感想を申し上げますと、良心という言葉はなかなか言いにくい言葉です。例えば、表立って言うとは気恥ずかしい気分になる愛という言葉とよく似ていて、そういうことを表立って言わなくてもいいだろうという雰囲気があるように感じます。

神学部の教員として言いますと、キリスト教、キリスト教ということあまり同志社の中で言い過ぎますと、ポコンと頭をたたかれるような、そんなことは言い過ぎなくていいのだというような反応、リアクションがあります。その意味では、現在のようにこれほど大きくなってしまった学校の中で、10人ぐらいで始まった同志社英学校のときの、良心に基づくとか、一人一人を大切にするというようなことが浸透していく場面と、われわれはあまりにも隔たってしまった状況にあるかと思えます。

現在の私立学校は、偏差値や、より良い就職先のある学校に受験生が集まるなど、いろいろな仕方で、それぞれの私立学校の個性や建学の精神は棚の上に置いて、とにかく良質な学生が欲しいという形で動いてきています。それは金太郎あめのようなもので、どこの私立学校に行っても同じような形で運営がなされているところがありますが、しかし、それでは最終的には国立の学校、旧帝大といわれる学校を頂点とする序列に押し込められてしまいます。

しかし、私どもの学校は、非常に個性あふれる、品格のある建学の精神を持っています。先ほど「旅人」という表現を使いましたが、常に、少しずつでもこの建学の精神を啓蒙しながら、そのものの見方を理解してくれる人たちを増やしていくことが必要ではないかと思っています。今までのことを振り返りますと、多くの人々はそのことを心にとどめてずっと努力してこられたと思います。しかし、その努力がどれだけの成果を上げてきたかという点では、ものの見方、さらに検討を重ねていかなければならないと考えています。

(加賀) ありがとうございます。まず法人同志社全体についての理事長のご見解、これからの展望も含めましてお話しいただきました。続きまして村田学長、よろしくお願ひします。

(村田) 今また、水谷先生のお話の中で、私の心の琴線に強く触れる言葉がいっぱい出てきました。気恥ずかしさということをおっしゃいましたし、序列のお話もなさいました。中途半端な人間なものですから、また碩学の言葉を引用させていただきますと、サミュエル・ジョンソンという有名な英文学者が「愛国心は悪党の最後の逃げ場所である」と言っています。

今は良心の話ですが、愛国心というのも少し似た感じがして、あまり愛国心、愛国心と言う人を信じられない感じがするのですね。本当の愛国者は、あまり愛国心、愛国心と言わないのではないかという気がするのです。愛国心という言葉、あるいはメンタリティにも、どこか気恥ずかしさみたいなものがなければならぬ。自分の育った国を愛するという気持ちと同時に、しかし、そういうことを堂々と言うのはちょっと恥ずかしいという気恥ずかしさ、リザベーションのようなものがないと、本物でない感じがします。

良心についてもそうで、良心、良心と言うのではなく、どこか気恥ずかしさがある。そうでないと、原理主義に陥ってしまうと思います。同志社には、良くも悪くもそういう気

恥ずかしさみたいなものがあるのではないのでしょうか。そのことが逆に、良心教育がもう少し体系立って行われてもいいのだけれども、それがうまくいっていないというところにもつながるのですが、私は大切な気恥ずかしさみたいなものが働いていると思います。

今、大学は国内外でさまざまな競争にさらされていて、当然、受験偏差値に始まって、大手企業への就職や各種試験の合格など、われわれは序列の網から逃れられない。社会的存在ですから、その中でも、がきながらやっていかざるを得ないのですが、同志社の人は、偏差値とか、大手企業の就職が何とか、司法試験が何とかと言って、「今年は少し悪かった」とか言いながら、どこかそれを笑っているようなところがあると思うのです。序列を気にしているようで、本当に心から気にしているのかといえば、「まあ、ええやん」みたいなところがあると思います。この世の序列を疑う気持ちや笑う気持ちというもの、大変大事なことではなからうかと思えます。

大学の取り組みとしては、もちろんこれまでもいろいろなことをやっているわけで、チャペルアワーとかアッセンブリーアワーとかいうものがございます。私も学生時代に、限られた経験ですが、同志社のチャペルアワーやアッセンブリーアワーで、そうでなければお目にかかれないような高名な学者や評論家の方々のお話を神学館で聞いたことを記憶しています。それから、同志社のスピリットウイークやスピリットツアーで、同志社ゆかりの熊本や安中、会津を訪問するという企画もあります。あるいは、メディテーションアワーという、キリスト教文化センターが中心になってやってくださっている活動もありますし、いわゆる同志社関連科目もたくさん設置されているわけです。

ただし、そのときに、チャペルアワーにたくさん人が集まってくれたら成功であるか、あるいは同志社関連科目の受講者が非常に多いと成功であるかという、必ずしもそうではなく、数では量れないものがあるだろう。そういうさまざまな企画がキャンパスの中にあって、参加者は少ないかもしれない、あるいは、最初は単位欲しさで受講生が多いのかもしれないけれども、そういうさまざまな小さな企画や試みの間から、やがてシナジーが生じてくるというのが同志社のいいところでしょうし、そう期待したいと思えます。

(加賀) ありがとうございます。木村先生、お願いします。

(木村) 新島は17歳ぐらいの時に江戸湾のオランダ軍艦を見て衝撃を受けたそうですが、いわゆる高校生の世代ですよ。脱国したのが21歳ですから、今で言う大学生の世代です。時代状況が違いますので意識も異なるかとは思いますが、いわゆる高校生・大学生世代の多感な時代に衝撃を受けて、脱国という大胆な行動に走っていく。そんな新島の人生をイメージしながら、彼が心を動かされた時と同じ年代の生徒・学生を、私たちは相手にしています。

中高生の時代には、学校礼拝に関してある程度の縛りが求められ、出席のカウントにも反映されています。しかし毎朝、礼拝から学校生活が始まるということは、同志社ならではの素敵な時間が確保されている事なのではないかと思えます。とにかく何らかのモノの音がザーッと流れている、そんな現在社会の中で当たり前前に生活している私たちにとって、学校礼拝という静かに、沈黙の中に身を置くことが出来る時間があることの大切さを、私自身は大切にしたいと思っています。

学校礼拝では、司会者である宗教部の教員が、「神様、今日も生命（いのち）を与えてくださってありがとうございます」と祈ります。その時いつも思うのですが、私たちは生きている事を当たり前のように感じているけれど、実は朝、あそこに生徒が集まってくるといふ一見当たり前に見える光景自体がは、私にとってはとても奇跡的に思える出来事です。時には休んでいる生徒やサボっている生徒もいるかもしれませんが、みんなが生命（いのち）を与えられて一堂に会しているというのは、私にとっても喜びですし、そういう貴重な時間から学校生活が始まるというのは、大切にしていかなければならない事柄だと思います。

学内の4中高、小学校、幼稚園も含めて、礼拝から学校が始まる。そして、キリスト教主義の学校ですから当然のことかもしれませんが、必修科目としての「キリスト教学」という授業がある。大学でも宗教学という授業があるかとは思いますが、これは公立にはない素敵な時間だと私は思います。更に、入学式や卒業式、それらがキリスト教式で行われる。そこで語られている一つ一つのメッセージが、一人一人の生徒たちの良心に問い掛けていく大切な時間です。

キリスト教のついでに話させていただきますと、2006年に開校した同志社小学校の1期生が今年ちょうど高校1年生になりました。この間、同志社小学校出身の高校1年生の生徒が、「同志社はバラバラだなあ」と授業中に言うのです。確かに私自身、同志社にはバラバラなところがあると感ずることもありますので、「何がバラバラなの？」と尋ねましたら、「同志社小学校の時は『宗教』の時間だった。中学に入ったら『聖書』の時間だった。高校に来たら『キリスト教学』の時間になった。バラバラだ！」と。

どうでもいいような話に思えるかも知れませんが、必修科目としてのキリスト教に関する時間が週に1時間確保されている。総合的学習の時間とか、今後やってくる道徳の教科化という時代状況の中で、やはり同志社は同志社なりのスタンスでもって、その時間を大切にしていこう、これは譲ることの出来ない良心教育の根幹に関わる事柄です。

更には、私たちが自覚しておかなければならない事は、「キリスト教学」という教科だけではなく、それ以外の教科の教員たちが、同志社が掲げている良心と向かい合いながらどういふ教育を担っていくか。こちらの方がはるかに大切だと思います。

たとえば、生活指導上シンドイことをしてしまった生徒とどう向かい合うのか。「良心を呼び覚ませ！」と、偉そうに言ってしまうえば簡単なことですが、そういうシンドサと向き合う時にこそ同志社の良心教育が生きる機会なのではないか。ただ家に帰して家族に託してしまうのではなく、学校がその一人の生徒とどう向き合って、その子が犯してしまった失敗から何を学ぶのか？ということ、教員自身が突き付けられる大切な瞬間です。良心教育が一番生きる場面は、聖書の授業や礼拝もそうかもしれませんが、むしろ生徒が何かしでかした時にこそ、向き合うことを余儀なくされた教員一人一人の対応であるような気がします。

その意味で、私は「同志社はキリスト教を看板に掲げている」という表現があまり好きではありません。ご飯に例えると、白いご飯にふりかけを掛けているような学校のイメージではなくて、むしろ炊き込みご飯である必要を感じます。同志社風に言うと良心ですが、聖書風に言うと、総長がよく語られる「地の塩」ですよね。塩味が前面に出すぎると塩辛くて仕方がないわけで、むしろ何となくちょうど良い調味料の味わいでなくてはならない。



その意味では、同志社は「ふりかけご飯」ではなく、良いだしのきいている「炊き込みご飯」のような良心教育。看板としての聖書の授業や礼拝だけではなく、教育活動の隅々にさりげなく染み渡っていて、あまり前面に出てはいないところに共感を覚えている一人です。

(水谷) 今、村田先生と木村先生の話聞いていまして、私は学生時代を思い起こしました。中・高は出ていません。大学から同志社に来た人間ですが、学生運動の世代ですから、その当時は、新島襄、新島ナショナリズムとは関係を持ちたくないという思いで過ごしてきました。しかし、社員として迎えられてからは、これは課題として新島襄をきちんと読まなければならないと思って少しずつ入っていくと、そこに敬服すべき素晴らしさを見いだしたのです。

新島襄は遺言で「倜儻不羈(てきとうふき)」という言葉を残していますが、木村先生も村田先生もおっしゃったように、「ふん」と思っているような人がたくさんいる中で、それをも受け入れられるような幅の広さというか、一つのものの方の中に入り込んでしまって、それこそが同志社だということにはならないような幅の広さというか、それをわれわれは常に気を付けていかなければならないのかなと感じています。

(加賀) ありがとうございます。これまで3人の先生にお話しいただいたのですが、私なりに理解したところだと、それぞれの共通点として、同志社の良心教育という場合には、一つはあまり教条的になってはいけないのではないか。どこか気恥ずかしいというお言葉がありましたが、そうした控えめな、混ぜご飯のような、あまり前面に出て教条的に掲げるのではなく、もう少し生活の隅々に浸透しているような、しなやかな良心教育が必要ではないかということだと、私なりにまとめさせていただいてよろしいでしょうか。あるいは、理事長先生から幅の広さということも、それに関連した言葉だと思えます。

女子大の方でも少し付け加えさせていただきますと、私どもの大学は英語名が DWCLA (Doshisha Women's College of Liberal Arts) という、リベラルアーツを基本とした大学になっておりまして、私の理解ですと、いろいろな就職率や学問もいいのですが、私にとって一番大切なのは、地の塩、世の光として、自治自立の人民としての女性を育成し、そういう人がやがて日本や世界を良くしていく。そういう人を一人でも多く育てたいというのが私の日ごろの念願です。

もちろん大学は社会の中で生きていかなければいけないので、昨日か一昨日もある会議で紹介があったのですが、小学校の先生の合格率が71.2%で過去最高だったとか、管理栄養士の合格率が今年100%だったとか、そうした面はもちろん大事なのですが、それ以上に、そうした武器をどのような形で社会あるいは人生の中で生きたものにしていくかという女性を育てたいと思って、ずっと教育者としてやってまいりました。

そういう点で言いますと、いわゆるリベラルアーツとキリスト教主義。同志社全体では自由主義と言いますが、女子大ではリベラルアーツと言います。この二つが、私にとっては良心教育の根幹です。いずれもとても難しい言葉ですので、私などには理解できないのですが、リベラルアーツというのは、私なりの理解では、一つは「からの自由」で、とらわれからの自由、必要からの自由です。そして、もう一つが「への自由」で、学問を通し

て、人間があるとならわれから解放されるということが、私はリベラルアーツの一つの意味だと思っています。

先ほどの水谷先生のお話ですと、良心教育の場合は、我にこだわって私というものに縛られているところからいったん視座を解放するということだと思っております。これは倫理学でもよく言うことで、二重の視点を持つ。カントの場合はそういう言い方をよくしているわけです。経験的と超越論的とか、哲学でよく使う言葉ですが、そうした視点を持つということが自分を自由にする。その一つの大きなきっかけがリベラルアーツであり、同時に、ではどういふ解放の仕方があるかというときに、キリスト教主義が出てくるのだと思って、私はキリスト教主義を非常に大事にしています。

女子大の場合、昔から授業開催日は毎日礼拝を守っています。30分という短い時間ですが、二つのキャンパスどちらも私は大切な時間だと思っていまして、なかなか全部出るわけにはいきませんが、週に1回はできるだけ出るようにしていて、今週も出ましたが、そうしたことによって自分を見つめ直すという非常に大きな機会ではないかと思っています。

実際にやっていることは、実は女子大でもたくさんありまして、私も調べてみたのですが、正課の科目と正課外の科目があり、正課は「聖書」が必修で、その他に「キリスト教の歴史」「キリスト教文化論」「キリスト教世界の探求」、それから「近代日本と同志社」というのもありました。同志社科目ですが、そのうちのDというのは講義プラス実習で、ボストン、アンドーヴァー、アーモスト、ラットランドと、相当新島フェチという感じのツアー付きの科目もあります。

正課外の活動としては、今言ったように、礼拝を毎日、原則として全ての授業開催日に行います。さらに、特定のクリスチャンだけが関わることではなく、全教職員が関わることになっておりまして、朝礼等も、クリスチャンでない先生たちや学生たちも、頼まれればする。私もしています。そういうような礼拝の時間が一つあります。

それから、メディテーションアワーという月1回パイプオルガンを聞く会や、祈りの会。これは特に東日本大震災があつてから、もう60~70回やっていると思いますが、小礼拝堂で行っています。その他、春と秋の2回、リトリート（修養会）をリトリートセンターで行うとか、特別キャンプや宗教部主催のワークキャンプもあります。これは、群馬県の様名にあります社会福祉法人「新生会」に1週間ぐらい学生が行き、お年寄りたちと一緒に生活をするのですが、そういうさまざまな取り組みをして、学生が人の苦しみや人の弱さを認識し、そうした人と共に生きていく。そういう人間を育成したいということで、いろいろなことを行っています。

ただし、先ほどもありましたが、この時代ですので、礼拝も少し参加者が少なくなってきていますが、数よりも続けることが大事だと思っています。私はそういう信念でして、数は減っても必ず人生の中で悩み多き年代がやってくるはずだと。そういうときに、「あのとき、ああいう礼拝があつた」と思い出して聖書をひもとく、そういうことについて振り返ることが私はあると思っています。そうしたことで、これをずっと守っていくことが女子大教育の根幹であると思っています。それがどこまで効果があるか、私も自信を持って言えませんが、少なくとも大事にはしていきたいと思っていますところですよ。

とりとめのない話をしてしまいましたが、あらためまして、これまでのお話で、村田先生もおっしゃったように、あまりにも教条的になるのは一番良くないというのはとても大

事な指摘で、お三人とも大体同じでしょうか。良心というスローガンはあっても、その意味や、やり方、あり方に関しては多様に、それぞれお互いに学びながら、できるところで日常的にやっていくことが大事ではないかと理解させていただきました。私のまとめ方でよろしいでしょうか。

これまでの取り組みについてお話いただきましたが、今後、これからどういう展望を持ってこうした良心教育を展開していきたいとお考えになっているのか、それぞれの責任ある立場からお話いただけたらと思います。

(水谷) 同志社の建学の精神を浸透させるということは、私は啓蒙の運動であると思っています。それは、時によってはわずかばかり、時によっては強くなることもあるかもしれませんが、そのことによってそれを受け入れられる人が少しでも増えてくることを目指しながらの運動ではないかと思っています。そのためには、加賀先生もいろいろとおっしゃいましたし、村田先生や木村先生もおっしゃいましたが、建学の精神を常に確認しながらいろいろな仕掛けが必要だと思っています。

それは、一般的に言いますと単にキリスト教とか、良心、地の塩、世の光というイメージだけでなく、今の若い人たち全般にこの学びの時期を大切にしておいてそこで成長してもらうためのさまざまな仕掛けを、学校として、法人としてつくっていかなくてはならないということです。そのためのまず第一歩は、教員の方、あるいは職員の方々にこういうもの見方について反対はしない、自分はそのまま 100%受け入れることはできないかもしれないけれども理解できるという形で浸透していくと、学生諸君にとっても何かいいことがあるのではないかと思います。

(村田) まず、同志社全体のことで申し上げますと、私ども同志社大学には附属の小学校と附属の国際学院がありますが、両方の校長先生が今日お越しですが、附属小学校の校歌に、「えらいひとになるよりも よいにんげんになりたいな」とあります。谷川俊太郎さんの作詞ですが、私は、これは同志社の教育の本質を言い当てているように思います。

理由は簡単だと思います。なぜならば、偉い人になるよりも良い人間になることの方が難しいからです。ですから、われわれは良い人間を目指すのです。偉い人になれたかどうかは答えが出ます。けれども、良い人間になれたかどうかは、いつまでたっても答えが出ない。これは永遠のプロセスだと言うことができるでしょう。それから、いわゆる社会的に偉い人は、その地位を離れば偉くなくなります。あるいは、組織や文化が変われば偉くなくなります。しかし、良い人間は普遍的にいつでもどこでも良い人間なのであって、良い人間であることの方がはるかに難しい。そういう教育をわれわれは目指しているのだらうと思います。

大学としての取り組み、今後の課題ですが、今、加賀先生が女子大学のところでリベラルアーツということをおっしゃいました。これも私どもにとって非常に悩ましいことは、同志社はリベラルアーツから出発したわけですが、新島襄は、日本のアーモスト大学をつくらうとしたわけですが、アーモスト大学は、アメリカで典型的な、最も著名なリベラルアーツ・カレッジの一つであり、全学で学生数が 1700 ぐらいだと思います。

同志社はもともとリベラルアーツを目指して出発したのだけれども、今や一大学園にな

っている、総合大学になっている。ここに、ある種の不一致がまたあるわけですね。原点においてリベラルアーツを目指してきたけれども、今や現実において非常に大きな規模の学園になっている。だからといって、われわれがまた 1000 人か 500 人の学校に戻ることはできないわけです。この規模の中で、なおかつ教育の原点としてあったリベラルアーツの精神をどれだけ追求していくかという答えの出ない不一致で、われわれは対話を続けなければならないのだらうと思います。

そういう意味では、これも先ほどのお話に出ましたが、もともと 10 人ほどの学校として始まって、緊密な人間関係からこの学園は出発したのに、今、非常に大きな組織になっている中で、いろいろなレベルでどれだけ緊密な対話や人間関係を築いていけるかということが、大変大事なことだらうと思います。教師と学生との対話もちろんそうですし、学生同士の対話もそうですし、教職員同士の対話もそうだらうと思います。あるいは、職員と学生との対話もそうだらうと思います。そういうオケージョンを、いろいろな形で大学あるいは法人がつくっていく、考えていくことが大事なのだらうと思います。

先般、職員の方々のマネージャー研修で少しお話させていただきました。その後、参加した方々が感想を書いてくださったのです。私は全て拝読したのですが、われわれ職員もキリスト教や同志社の歴史についてそれほど知らない、そういうことを知る機会がもっと欲しいというようなご意見を、何人かの職員の方が書いていらっしやいました。ですから、職員の研修もそうですし、教員ももっと知るべきだと思います。そして、語り合う。そういう機会をたくさん設けなければならないのだらうと思います。

他方で、私どもは大学ですから、研究というファンクションも持っているわけです。ということで、良心についてそれぞれが思い悩み、そして語り合うという営みもちろん大事ですが、しかし今度は、人類の知的歴史の中で良心がどのように議論されてきたのかという良心のアカデミックな研究も、やはり大学のミッションとしてしなければならないのだらうと思います。同志社が良心教育をうたっている以上、神学の観点から、あるいは哲学の観点から、政治学の観点から、生命倫理の観点から、さまざまな視点から良心を学問的に探求するというプロジェクトを、ぜひ今後展開していきたいと思っていますところでは。

(木村) 「えらいひとになるよりも よいにんげんになりたいな」。毎年、同志社小学校の入学式や卒業式に出席させていただいているので、なんとなく頭に染み込んでいるので、すから不思議です。でも、この染み込んでくるということがとても大切だだと思います。そこの空間を共有するということでしょうか。入学式、卒業式、スポーツフェスティバルと、そこに座って同じ空気を吸って、校歌を歌って、覚えようと必死になっているわけではありませんが歌詞を見ながら歌っていたら、かれこれ 6~7 年たったら、ちゃんと「かんじるゆめみる」といかける…」と、小学校の校歌なのにしっかりと心に刻まれている。

何を言いたいのかと言いますと、中・高として何を大切にするのか?と問われた時に、そこに漂っている空気の大切さを挙げたいのです。ハード面がだいぶ同志社法人内で整いつつありますよね。たかがモノなのですけれども、壁や床に染み込んでいるものがあるはずで。伝統とか、その学校の空気とか。生徒たちは朝 8 時過ぎに学校に来て、授業を 6 時間受け、クラブなどを含めたら夜 6 時まで、1 日の大半を学校という空間で過ごすわけです。その意味では、その学校に漂っている空気というものを侮ることは出来ないと思

ます。生徒が感じられる空気をどう学校は提供していくのか、この部分に教職員は力を注ぐべきだと思います。

確かに、知識や技術は大切です。そして知識や技術を教え込むことはできると思います。しかし、生命（いのち）とか、心とか、良心とか、これらはなかなか教え込むことはできません。むしろ自ら感じ取るものなのではないか、そんな思いで今日ここに加わらせていただきました。

その意味で、今後の展望という点では、漂っている空気感はしっかり維持していきたいと思います。前向きな思いはあるのですが、今まで蓄えてきたハード面に染み渡っている空気、ソフト面での漂っている雰囲気。その空間で大半の時間を過ごしている生徒たちが、教え込まれなくても、ただ学校で生活し、卒業していただくだけでも、いずれ10年、20年、70～80年の人生のスパンの中で、どこかで花開くのだろうという期待を持ちながら、日々の教育活動に当たっています。

私は当然の事とはいえ、同志社はいわゆる偏差値も高く維持していく必要もあるのかもしれないませんが、むしろ単に大学に入るためだけの受験勉強ではない、やはりいのちを与えられて生きているわけですから、人類の益となるような学問をそれぞれの教科が提供していく。このことにみんなが志を持って力を注ぐならば、そこで育つ生徒たちは自ら感じ取り、空気をふんだんに吸って、良心を携えて、やがてその人なりの香りを放っていくだろうという確信を持っておりますので、そこに賭けたいと思います。

（加賀） ありがとうございます。幾つかのキーワードが出てきたと思いますが、「偉い人よりも良い人間」というのは同志社的だと思います。それを聞いてふと思い出したのは、何年前に同志社校友会と同窓会の合同の支部総会が確か群馬県か埼玉県であったときだったと思いますが、講演で同志社出身の保阪正康さんという評論家の方が、戦前から日本をつくったキーパーソンを何人か挙げて、戦前であれば東条英機、戦後なら田中角栄など、その周りに同志社の影がない、要するに、日本をつくった人の周りには同志社の人間がおらず、それをむしろ誇りに思うというようなことをおっしゃったと記憶しています。同志社の人間は、偉い人よりも良い人に徹したものですから、周りにいなかったのもあって、むしろそういう生き方の人を同志社は育ててきたのではないかというお話で、これは大事な同志社の教育のポイントだと思いました。

もう一つ、悩みは共通していると思うのですが、女子塾も10人ぐらいで始まったものが今や6500人、同志社大学が2万8000人、全部合わせたら4万何千人という中で、かつてと同じように実践することは全く不可能ですし、不特定多数のいろいろな考えを持つ人が入ってきている。そういう中でどうやっていくのかというのは、理事長先生にも課せられた大きな課題だろうと思いました。これは仕掛けが必要だという話もありました。

それから、教職員の方もどういう形で関わっていくか。知る機会というのも、女子大でも、特に職員の方ですと10時半から礼拝があるのですが、仕事が一番調子に乗ってきたときなのです。なかなか参加しにくい。教員でも、1校時と2校時の間になりますので、なかなか参加しにくいということもありました。もう一つ大きなことは、これをきっかけにして、同志社大学も女子大学も含めて、良心とは何かということをもう少し突き詰めて学問的に研究していくといえますか。雰囲気で行くということも大事だと思うのですが、

リーズナブルにしていくということも同時に大切なことではないかということも承ったわけです。

まだまだ話がありますが、与えられた時間が既に尽きておりまして、フロアの質疑応答の時間を取らないと私が叱られてしまいますので、この辺で司会にバトンタッチしたいと思います。

## 質疑応答

(司会) 講師の皆さん、どうもありがとうございました。本日は同志社の良心教育をテーマにパネルディスカッションをしていただきました。予定は7時20分までということになっていて、既にオーバーしています。時間がほとんどないのですが、短い限られた時間ではありますが、質疑応答の時間としたいと思います。ご質問の方がおられたら、どうぞ手を挙げてください。

(フロア 1) 本日はありがとうございました。ビジネス研究科に現在在籍しているものです。私は香里中学校の出身で、中・高・大で、今ビジネス研究科で、もうこれで12年になりますので、私がきちんと授業を受けていれば、恐らく良心の塊になっているはずなのですが、そうはなっていないのですが。良心というものを私も授業や生活を通してずっと学んできた中で、良心教育は、もともと良い人、良心を持っている方には浸透しやすいのではないかと考えています。ただ、今、同志社が非常に大きな大学になり、人数が増えて、それが浸透しにくくなっているのではないかと考えています。

例えば、去年、今年でしたか、忘れましたが、USJで同志社の大学生が暴れてという話がありました。同志社の学生だけではありませんが、恐らく本当の良心というものがあれば、きっとそんなことはしないのではないかと考えています。そう思ったときに、良心教育というものは、なかなかそういうものに振り向いてくれない方に浸透させるというか、そういう人たちの振り向かせることが大事なのかなと考えています。普段から振り向いてくれる人は割と素直に良心教育を受け入れてくれると思うのですが、そうでない方に対してどう浸透させていくのか、何かお考えがあればお聞かせ願いたいと思います。

(加賀) どなたがよろしいですか。では、まず理事長先生に。

(水谷) 教えていただきたいです(笑)。USJの人は、後から良心の呵責を覚えているのではないのでしょうか。本当に日常的には難しいですね。また、「自由」という言葉も、何をしても許されるという意味で通用していますので、そういう発想を乗り越えないとなかなか新島が語る良心には至りません。それを在学中にそこはかたなく感じてもらって、社会人となるときに、もう一度ものの見方を整理するようになっていただけるととてもありがたいと思います。しかし、難しいというのが、実際に実感しているところです。ごめんなさい。

(村田) 二つのことを申し上げたいのですが、今、USJでの事件を例に挙げられました。

大学に関して生ずるさまざまな事件、不祥事の類にどう対処するかということは、良心とは別に、こういう行動をしてはいけないということを教えればいいわけです。それは、内面的に良心的であろうがなかろうが、こういう行動を取ったら社会的に問題になるとか、あるいは罰せられるということについて教育をする。これはビヘイビアに関することです。これは、割と一律に、マニュアル化して教えることができる程度だと思うのです。そういう部分でのマニュアル化が大学は遅れているし、同志社大学は遅れているかもしれない。ここである種の努力のようなものが要るかもしれないと思うのですね。これはある種の対症療法のようなことです。

ですから、最近よく起こる事件は、こうやってカシャカシャと撮ったものを自分の Twitter に上げたら、それが思わぬ余波を生んで社会的な制裁を受ける。こういうソーシャルネットワークの扱いについてのガイダンスをしっかりと教育することはできることですし、やらなければいけないことだと思います。それは一つの答えです。

他方で、あまり一般化してはいけませんが、USJ の事件もそうだと思いますが、複数の大学にまたがってトラブルを起こした学生さんたちがいますが、仲良しグループみたいなもので固まっていて、いつもそれで遊んでいて、「みんなでやれば恐くない」ではないけれども、それで発生した事件だと思います。そこで欠けているのは、多様性というか、異なる者との対話だと思うのです。自分たちの何人かの仲間の中で常識になっていること、規範になっていることが、社会一般の規範だと誤解してしまい、異質な価値観や異質なものの見方に出会っていない、ある意味でイノセントな人たちの危険性みたいなものがある。

そういう意味では、大学が、一人一人に浸透させることも大事ですが、異なる価値観や異なる文化やものの考え方を持っている人たちが会える機会をつくることによって、自分たちが仲間内で遊んでいて「ええやん、こんなん」と思っていることが、別の学生からは全然受け入れられないのだということに気付いてもらう場をつくっていくことはできるのではないかと思います。

(加賀) よろしいでしょうか。もう 1 件、短い質問がありましたら、どうぞ。

(フロア 2) 質問ではございませんが、感想を申し上げたいと思っています。同志社の建学の理念のキーコンセプトである良心教育をめぐって、現在、同志社の教育を引っ張っていただいている先生方に非常に貴重なご発言を頂きました。ありがとうございました。

つい 2~3 日前に、ホームカミングデイがございまして、全国から卒業生が母校に戻ってまいりました。彼らと話をしていると、大学紛争時に同志社に学んだ者もおりますし、いろいろな学生が戻ってまいりましたが、例えば保護司をしている人がおりました。先ほど「地の塩」の話が出てきましたが、そういう形で、在学中に同志社のキャンパスで呼吸して、その呼吸に味が付いているかどうかは気が付かなかった彼らが、実は卒業後何年かたって「地の塩」ともいえる保護司のような仕事を積極的にやっているというところに、私は 30 年前、40 年前の彼らを思い出しながら、やはり同志社の教育はこういうところで生きているのだと思ったわけです。

これだけ大きくなった同志社に、こういう題でパネルディスカッションをしていただくことは、非常に重要です。また、教条主義で押し付けられることは同志社の体質ではあり

ませんが、やはり数年に一度はこういう催しがあってもいいのではないかと。先生方の発言に対する批判ないし協調、いろいろな意見が出てくること同志社の教育を活性化させることにもつながるという意味で、本日の試みは大変結構であったと私は思っています。ありがとうございました（拍手）。

（司会） 加賀先生、水谷先生、村田先生、木村先生、どうもありがとうございました。あらためてお礼の拍手をお贈りしたいと思います（拍手）。どうもありがとうございました。

これもちまして、本日の「良心教育に関するシンポジウム」を閉会させていただきます。本日はご来場いただき、ありがとうございました（拍手）。